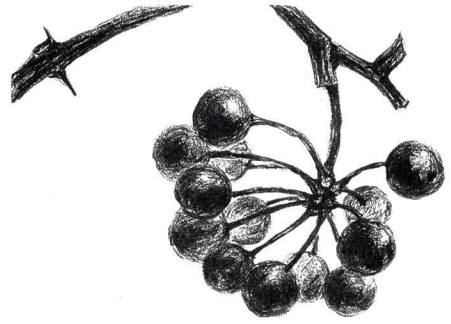


# 朝日 歌壇 俳壇



〈サンキライVI〉 日高理恵子

### ◆大串 章選

ふる里につつまれてゐる日向ほい  
 (八代市) 山下しげ人  
 無頼派の作家を惜しむおでん酒  
 (伊賀市) 福沢 義男  
 歩きまわると見渡せば枯野中  
 (東京都) 徳竹 邦夫  
 熊除けの鈴一列に登校す  
 (大阪市) 今井 文雄  
 急行も快速も過ぐ駅小春  
 (大和市) 荒井 修  
 独身寮の軒に故郷の柿野す  
 (高槻市) 日下遊々子  
 思考より検索の時代激石忌  
 (東村山市) 鈴木 忠  
 老漁師逆らふ鮪釣り上げる  
 (新座市) 丸山 巖子  
 木守柿悲鳴を上げて食はれけり  
 (熊谷市) 内野 修  
 開汁のやわらかきものかたきもの  
 (相模原市) 井上 裕美

【評】第1句。身も心も温まる至福のいつとき。懐かしいふる里。第2句。無頼派の作家というと太宰治や坂口安吾などがいるが、この「作家」は伊集院静氏か。第3句。「九二才の実感です」と添書にあり。歩いてきたのは人生の道のり。

### ◆高山れおな選

かじけ猫路肩の湯気に集まりぬ  
 (別府市) 樋園 和仁  
 ゆふまくれ屏風へ帰る虎と獅子  
 (東京都) 吉竹 純  
 半焼けの表紙の女優焚火跡  
 (栃木県壬生町) あらゐひとし  
 チョコレートばきつと折つて開戦日  
 (高松市) 島田 章平  
 霜までの命皇帝ダリアかな  
 (川越市) 大野有之介  
 新しい林の湿り小春風  
 (浜松市) 野畑 明子  
 落葉焚くしがみついたる空蟬も  
 (東京都府中市) 矢島 博  
 戦火赤し青き地球の年暮るる  
 (伊賀市) 山島 美紀  
 エンジンをはとつ吹かして秋取め  
 (新庄市) 三浦 大三  
 文化の日誰も死なない映画観る  
 (大崎市) 笠原 直子

【評】樋園さん。別府なら湯気も盛大。ただし、温泉でなくとも、寒冷地ならあり得る光景か。珍しい着眼。吉竹さん。夕暮れ時の動物園で感じた哀愁から生まれた幻想、と読んだが。あらゐさん。「半焼け」が面白い。生々しくも侘びた印象。

### ◆小林貴子選

半月やもう半分の恋しうて  
 (佐倉市) 葛西 茂美  
 波郷忌の薬膳鍋や鶏牛旁  
 (千葉市) 相馬 晃一  
 俳句とは感動詞なり冬来る  
 (東京都) 雅木 悠一  
 新聞が届く勤労感謝の日  
 (相馬市) 根岸 浩一  
 否定語を使ひ果たして年暮るる  
 (金沢市) 前 九疑  
 オランダより来しヒヤシンス夜に咲く  
 (東京都) 青木千禾子  
 大皿も納豆汁も母もなぐ  
 (相馬市) 立谷 大祐  
 南を前衛的に冬鴉  
 (真岡市) 竹田しのぶ  
 忘年会を送年會に変えてみる  
 (八尾市) 宮川 一樹  
 一本のマフラー友と合体す  
 (三鷹市) 宮野隆一郎

【評】一句目、半月に寄せる思いにハッとさせられる。二句目、肺病に苦しんだ石田波郷に、体の温まる薬膳料理を捧げたい。三句目、最短詩型は多くを省き、感動の中心部分を読者に届ける。四句目、配達の方、いつもありがとうございます。

### ◆長谷川權選

小春日や自然の愛に日々感謝  
 (新宮市) 中西 洋  
 戦争がストープの前また通る  
 (神栖市) 片伯部 淳  
 着ぶくれてあつさまと影法師  
 (彦根市) 阿知波裕子  
 気に入りの本と毛布と同じ椅子  
 (阪南市) 春木小枝子  
 鼻や静かなる人恐るべし  
 (筑西市) 加田 怜  
 鰯日和友ひとり得て帰りにけり  
 (新座市) 五明 紀春  
 一ページめくるが如く冬が来る  
 (長岡京市) 寺嶋 三郎  
 全山も庭の一樹も紅葉晴  
 (愛知県阿久比町) 新美 英紀  
 思ひきや小春の内の雪見酒  
 (名古屋市) 池内 真澄  
 新井家の今年の漢字「痛」なりき  
 (栃木県壬生町) あらゐひとし

【評】一席。大きな構えの一句。小春日和を「自然の愛」とたたえる。二席。ふとよぎる戦争の幻。重い外套を着て。三席。影法師も着ぶくれて。自分の姿を見せつけられるような。九句目。十一月の木曾。十句目。骨折、虫歯、ぎっくり腰。

## 短歌時評

### 鳳仙花とマヨネーズ

小島 なお

去る十月二十九日、東京都杉並区にある角川庭園にて開園十五周年記念「詩歌館まつり」が開催された。催しのひとつとして俳人の西村麒麟さん、俳人であり歌人でもある堀田季何さんと、歌人の私で話をした。テーマは「俳句ミーツ短歌」。これは堀田さんの著書から借りてきたタイトルで、対岸の詩型である俳句と短歌を出合わせようという趣旨である。話題になったのが麒麟さんの句。

絵を見る(あるいは描く)のが好きであること、一人であるのが好きであること。趣味と生き方、種類の異なる「好き」が「も」で並列して語られる「好きがおもしろい。秋の季語「鳳仙花」のあざやかな赤色のすこし幼いような印象が、「好きで」「好きや」の気持ちのため押しに似合っている。

「鳳仙花」が十分にいいことは前提として、歌人なら結句に何を持ってきたいか、と考えることに。たとえばマヨネーズはどうだろう。絵が好きで一人も好きやマヨネーズ。収まりがいいのは当然鳳仙花である。けれど、マヨネーズのあの素材の味をすべてマヨネーズ味にしてしまう明るく強かさ、は、「好き」の押し強さと通うのでは、とも。型の中心へ向かって言葉やイメージが収斂してゆくのが俳句なら、型をはみ出そうと拡散するのが短歌ではないかと常々思っている。

マヨネーズ案は会場で賛否それぞれ反応があったが「短歌っぽいこと。ジャンルを超えてミーツすることは「らしさを考えるきっかけになる。(歌人)」

## 風信

正木ゆう子句集「玉響」 蛇笏賞俳人の7年ぶりの句集。「おほかたは蕾よ梅のうれしさは」「対岸に水飲むきつね荒雪」「玉響のはるのつゆなり凜々」と(春秋社・2420円) 高柳克弘著「NHK俳句 添削でつかむ! 俳句の極意」副題は「7つのメソッドで力がつく」。「感情を『もの』に託す」「瞬間を切り取る」など。(NHK出版・1650円)

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。